

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
 昭和五十四年八月十五日 第三種郵便物認可
 発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三六二号)

慈

光

第三十一卷

第八号

目次

撰	大悲の願船に乗じて……………	花田正夫……………	(18)
取	念仏詩抄……………	木村無相……………	(15)
不	聞光願生……………	清水凡秀……………	(12)
捨	① 自照日誌抄(12)……………	西元宗助……………	(10)
……………	御一代記聞書抄(続・一)……………	井上善右衛門……………	(7)
……………	釈迦嚴父の抑止・弥陀悲母の引接……………	近角常観……………	(1)

釈迦嚴父の抑止・弥陀悲母の引接

近 角 常 観

大経、五悪段の説法

先達て求道会館の落慶式後は、朝夕仏前で、讚仏偈を讀まして貰うをご縁として、本偈をより所としてお話をして居ります。これは、諸仏菩薩が阿弥陀仏の浄土に詣でて、仏を讚歎し給う偈であるが、それ程に阿弥陀仏の本願が、一切諸仏に超え勝れ給うというのは何処であるか。これが第一の問題であります。

今それを手短かに申せば、一切諸仏の教えは、諸悪を作ることなかれ、衆善を奉行せよ、である。そして自らその心を淨うして仏の境界に到るとの教えである。まことに結構な尊い教えであるが、如何にせん私共實際において、真面目にそれを実行しようとしても、行うことが出来ぬ。

さて、大無量寿経は、過度人道経の名がある程で、私共が真面目に守るべき人道を説かれた経である。中でも下巻には有名な五悪段があつて、五悪を誡め、五善を勧められ

てある。ここを讀むと一言一句として私共の日常生活における浅ましい処を示されてある。一、二箇所あげて見よう。

第一悪とは、諸天人民及び生きとし生ける類のものは、衆悪をなくそうとしている。強い者は弱いものを征伏し、互に殺し合い、傷つけ合い、呑みあい噛みあつて、善を修めることを知らず、惡逆無道である云々。

第二悪とは、世間の人民、父子兄弟、夫婦一家すべて義理をわきまえず、国法に順わず、ただおごり、みだらで、たかぶり、わがままで、自分の意を満足しようとして、氣ままを働き、互に欺き惑わし、出鱈目を云つて、実意がない。心はへつらいで一杯で、言葉たくみにお上手を言ひ。賢いとねたみ、善人をそしつて、無実の罪におとしられる。君主が不明で、臣下はそれに乘じて勝手なことばかりする、云々。

第三悪とは、世の人々は、もちつもたれつして住んで居るが、この世に生きている寿命もいかほどでもない。そ

の人達も、賢愚、貴賤、様々である。その中に不善の人が居て、いつも邪惡な念をいだいている。ただ姪らなことばかり思つて、胸は煩悶で一杯で、起つても坐つても安まることはない。貪欲が強く、財を惜しんで、どうやってでもふやそうとかかっている。また美女に心ひかれ、外目かまわずふざけちらし、家が乱れてしまい、かくて財産を費いはたして、国法を犯すようになる云々。

第四悪とは、善を修めようとせず、互に教え合つて惡事をする。二枚舌、惡口、妄語、綺語をつかつて、人をおとし入れてその徳を傷つけ、鬭争をおこして世を乱す。両親に孝養を尽さず、師長を軽んじ、朋友に信義をまもらず。自分が尊貴の地位にあると、尊大にかまえて自分ばかり道になつていとうぬぼれ、無暗に威張つて人をあなどっている、云々。

第五悪とは、なまけてばかり居て、一向に善もせず、身を治めず、家業を励まないから、一家親族が、飢え凍え困苦する。父母が意見すると目をいからし言葉もあらく口ごたえする。言うことに角が立ち、意見にそむく有様は、かたき同志のようである。こんな子はむしろない方がよいと親に思わせるようになる。又人と物を取与するのに節度がないから、多くの人々がみな迷惑する。又恩にそむき、義理を守らず、恩にむくい、借りたものを返

す心もない。こうして落ちぶれても二度と昔にかえることも出来ない。それでいて他人の物を奪い取り、勝手にまぎらし、他から奪つた財宝で酒にふけり、美味をむさぼつて、無暗に飲み食いする、云々

かく私共の守るべき人道をきびしく説かれたのが五悪段の説法である。

抑正文と親鸞聖人

さて、五悪段でこの様に説かれたのは何故かというに、御承知のように「大経」の第十八願に「設い我仏を得たらんに、十方衆生、至心に信樂して我國に生れんと欲して、乃至十念せん、若し生れずば正覺を取らじ」と、かく悉く救うと仰せられた後に

「唯五逆と、正法を誹謗するをば除く」と、取除けが加えられている。

全体本願において、悉く救うとあるのに、この唯除が設けられたのは、釈尊が私共を誡めて下されたお言葉である。この誡めの御一言が、下巻になつて五悪段の説法となり、世間の人民等これこれの惡事があると、ひしひし私共の心中をおさえてお説き下されたので、これを讀むと、一言一句が私共日々の行いに的中する。

これは、現に私が煩悶した時、この五悪段の文を書いて苦しんだことがある。その時、自分の當ると思つた一言一句

に点を打った。今もそれが残って居ります。苦しんだ時だから、有難い処へは一つも打って無い。悪い所ばかりに打ってある。これが、釈迦嚴父のきびしいお誡めである。

さてこのお誡めは、一切諸仏の教えられる諸悪を作すな
がれ、衆善を奉行せよ、の教である。これは釈尊御一代の
教にしても、飽くまで戒定慧の三学を守り、何処までも善
を行への仰せである。而して三世十方の過去七仏の教えも
皆これになる。ここから唯除のお言葉も出たのである。

このお言葉は、実に厳しいお言葉である。如何に阿弥陀
仏の本願と云うても、五逆と正法を誹謗する者は除くとい
う厳しいお言葉である。

然るに、よく気をつけねばならぬことは、親鸞聖人がこ
の十八願の文を書いておいでになるのを見ると、如何なる
場合にもこの唯除云々の文が落ちてあるのが無いのである。
私共にすればこの御文はむしろ取って置きたい程に思うの
に、聖人は必ずこれを書いてお置きになっている。

して見ると、こはおそらく、釈尊が此世に來り、教え給
う所はこの一言にあるとの思召しであろうと頂かしてもら
われる。してみれば私共に於ても、釈尊のお教えは、この
抑止の御文にあることをしつかり頂かして貰わねばならぬ。
換言すれば、三世諸仏のご慈訓は、悪はしてならぬとの厳
しいお誡めであるということである。

買って来た。こんな物を買って仕様がないと厳しく誡めて
「買った処へ返しに行け。然し汽車賃はやれぬから歩いて
行け！」そして母親に「歩いて行かすのだから握飯を作
ってやれ」と。

子供は仕方がないから握飯を持って泣く泣く出て行った。
あとで母親を呼び「お前汽車賃をやったろう」やっては叱
られると思つてやりませんでした」と言われると、思いも
かけず「この馬鹿め、俺はああ言つたけれど、お前がやる
だろうと思つていたに」と叱られたという話である。

一方に汽車賃はやれぬと言われた嚴父の誡めは極りなく
激しい。そこになると現に親鸞聖人は、御子様の善鸞さん
が、お慈悲の真意にそむかれたため勘当なされた。そこは
飽くまで厳しいが、それは是が非にでも押しつけて、其者
をいかぬとある厳しさではないのである。その裏に、母に
金を渡したかと聞く父の意は、その許すべからざる悪事で
あるが、それをしでかした子供の身が、いよいよ可哀想で
如何にしても捨て切れざる親心である。これが仏の本願の
お意である。

全体、従来の真宗の信者には、釈迦の抑止は方便である、
あれは取り去つてよいのだという聞き方があつて、切角涙
のこもつた釈尊のお誡めを初めから軽視してかかる風があ
る。「なに父はあんなに云うが、母はきつと金をくれる」

ところで、ここに遺憾ながら、何としてもその教えに随
い得ない私共というものになってくる。ここが大切なこと
で、これから先きが問題なのであります。

真宗の人に抑止の意が徹底して無い

現に日本の思想界にしても、問題はこれ一つになつてい
る。一方真面目な思想からは、飽くまで正しくせねばなら
ぬと考え、その通りに実行しようと努力する。ところが、
その結果は反対に、むしろ行い難い方面に走っている。こ
こに諸仏に超え勝れた弥陀の本願が現われて下さらなけれ
ばならぬことになる。

私は考えますに、従来聖人が抑止のお言葉を重視してい
られるのに、従来真宗の人に、その意味が十分に徹してい
ないようである。初めからこれだけは不要視して、悪うて
もお助けと軽いことに取つてゐるから、釈尊の仰せられた
意味合がさっぱり明らかになつていない。たまたに俗諦門を
やかましく云う人は、釈尊の説かれた五悪段は、俗諦故、
「善をせねばならぬのじゃ」と、そのまま自分に当てがつ
て「出来ぬからいかぬ」と泣いてゐる。これでは一方
に力説して下さつた弥陀の本願という味わいが全然消えて
いるから安心されようはずが無いのである。

さて今、私共の頂くべき点は何処にあるか。何時も繰返
す例の福島県の或る資産家の話である。息子が不要の物を

と、これで、父の意も母の意も分らぬ様になつてゐる方が多
いのである。

そもそも釈尊の慈父のお意にする時は、何処までも、私
共を善くさせて行きたいが腹一杯である。私共としては、
どこまでも戒定慧の三学を守つてゆかねばならぬが、釈尊
の遺法、諸仏の通誠である。凡そ人として善く出来なくて
もよいという法のあるべきはずがない。然るに末法の時に
於て、その守らんならぬことが、守り得ざる私共という者
が出来て来た。ここにその守り得ざる私なることをかねて
知ろし召し、その者のために特別の思召しより現われて下
されたが、唯一南無阿弥陀仏のお救いである。故に一方に
この真面目な方面が無くては、本願の有難味は頂けない。
現に私如きもお慈悲を知らせて貰うたというは、つま
りこのせねばならぬことに力を失い、自分の立場に行きつ
まつて、初めてただかせてもらつたのである。

「善くなりた」と「悪くてもよい」と

そこで今日の道を求める方には両面がある。従来真実の
教えを聞きつけた側と、新に理想をもつて立つて行こうと
する青年諸君の側と、この二つである。両方共にここはよ
く聴きとつていただかねばならぬ。

青年諸君にすると、真宗の教えは何程罪惡救済と聞かさ
れても、元来の本意が、出来るだけ善いことをしたいにあ

る。そこで五善を求め五惡を避ける立場にある。ことに求道を旗じるしとして来る人のすべては、皆こうなっている。しかし、実際にそれが出来ているかというのと、一つとして本当に実行できぬのに皆苦しんで居る。私などもこれには実に血涙を絞った。この点は青年諸君に私は十二分の御同情を持つている。

一方聞きつけている側の人は、頭から、そんなこと出来るものか、出来る位なら凡夫でない、すぐ口先きだけで云う。そんなら本当の安心が出来ているかというに、実際は、自分はこんなに善くしているのに、人が人が、と思っている。心の底では絶えず、自分はよくしている、否、せんならんと思いつつ、聴聞の時だけ、悪くてもかまわぬのだ、という聴ききようである。これでは、どこまで行ってもさまりのつくということが無い故、余程注意せねばならぬ。なおこれが色々な形式をとって現われて来る。中には、法を求め、安心を求めめるために、もっと善くならねばならん、と云う人がある。或は、もっと喜ばねばならぬ、もっと敬せねばならぬ、と。これは一応他の善事を行うために苦しむとは違い、信仰のためであるから、自力作善とは別の様だが、矢張り同じである。

全体人間は妙なもので、筍の皮をむくように、同じことを何時までも繰返す。初めは世間的に善くしたいと考えて

努力奮闘、しかもどんなに努めても思うようにいかぬので、血涙を流して悲しんでいる側の人がある。それらの方々に深く同情すると共々、一方真宗の人が、このままながらのお助け、と、これで自分は頂けた積りでいて、その実ちつとも頂けて居らぬ。そのままとの処にじつとして居る、岸上に登れぬ、と云いつつ、今日自分が沈んでいくことも知らずにいる在来の真宗の人に深く気をつけてもらいたいのである。

これは、少し気をつけて見ると、現在日本の社会もみなこれになつて居る。一面に真面目に、と、厳格な道德主義、努力主義が盛んに唱えられる半面に、それで何程やつて見ても、どうにもならぬところから、一方に悪いまま平気で押そうとの主義がしきりに行われている。

こうしてこれが社会上の実際問題となつて、両者がそのために苦しみをきわめているという有様である。ついに何処をさがしても阿弥陀仏の本願は影さえも見あたらぬ。宗教界と言わず、一般社会と言わず、みんな悪くてもよいと、という横着主義と、出来るだけよくやろうという律法主義で行き詰つて居るといふ現状である。

そこへもつてきて、今かく私共が、如何にしても真面目に行いきれず、正しくなり切れない、結局苦しむより外な

それではいかぬから、次に理想的にと企てる。次には、宗教でなくてはいかぬ、いや宗教は他力でなくては、信仰を得なけりや、ついに最後には、頼み心がどうじや、後念はこうじや、と。結局ちつとでも善くしたいの心の外に無いのである。

昨日も或る方が「自分は信仰は頂いて居るが、頂いた上の心持が聞きたい」と言われた。私は言下に「心得を聞かねばならんよう、聞いたと言えるか」と申上げた。人間は誰しも皆同じようなことで苦しんでいるのである。信仰問題で苦しんで、頂かねばならぬ、と云うのは、結局よくせねばならぬ、と云うとすこしも違わないのである。そこでここになると、もう人間は取るべき道が無い。行き詰まつて、どうにもこうにも仕様がなくなる。

ところが、聞き慣れた側の人は、初めから、人間がそんなに喜ぶことがあるものか、喜べぬままじや、悪いままじや、疑いのままお助けじや、と。これは、言葉でお助けを引つ付けるだけで、その実安心にも何にもなつて居らぬ。求道者にきつとこの二種類がある。これを現代的に言つと、一つは修養風、今一つは、仕様がなからあるがまま勝手にやれ、という流儀である。如何なる人でも、必ずこのいずれかになつて居る。

殊に私がこれを言うのは、今日世間に真面目な青年が、

い性分を、かねて哀われと見抜かれて、そのための親の特別の心配が現われて下されたのが、実に弥陀の本願である。故に「悪くてもよいのだ」であつてはならぬ。悪いためにかく行き詰りきつて居るのである。一方に「そのような者故、一文も金はやらぬ、五十二段歩いて行け」と厳しい父の誠めをうけ、最早起き上る力も失せ果てている我等である。

然るにここに思いがけなく、大悲の母現われ「その汝のふがいないのはかねて見ておいた。そのために母がかねて用意して置いた故、これをやるから、汽車に乗って行け」と。このふがいなき奴をば飽くまで下からかばつて下さる母の御心である。一度この御心に接する時、私がふ甲斐ないのがそんなにまで可哀想でお心を痛めて下されたのであつたか、有難いと、今まで真面目に行える気で居た者は、その長い間の高慢の心を恥じ、悪くてもよいで腰掛けて居た者はその横着を心から恐れ入り、お慈悲一つに腹底から満腹して、ここに初めて人生を超越させて頂けるのである。

御一代記聞書抄 (続・一)

井上善右衛門

かつて御一代記聞書抄の拙ない講讀を『自照誌』に数年間連載いたしました。昨年四月余儀ない事情で同誌が廃刊となり、中絶の結果となりました。しかしなお讃仰いたしたい条々が残っていますので、花田先生の御好意に甘え『慈光誌』に再び筆を執らせていただく次第です。諸兄弟の御叱正をお願いいたします。本文は島地大等師監修『眞宗聖典』に拠りました。

至りて堅きは石なり、至りて軟かなるは水なり、水よく石を穿つ「心源もし徹しなば菩提の覚道何事か成ぜざらん」といへる古き詞あり、いかに不信なりとも聴聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候ふ間、信を獲べきなり、只仏法は聴聞に極まることなりと云々。

(一九二条)

一五二条に「凡夫の身にて後生助かることはただ易きと

行という文字から我々が思い浮べるような、ただ易き道ではないのだということを示されているお言葉です。

信という心の開明は、私が切り開くことではありません。大いなる真実心に摂取されることなのですが、久遠劫来我執に凝り固まっている人間の心は、如来の真実心に背を向けて「我」の角を振り立てて、真実の大悲から逃げ廻っているのですから、如来の摂取の御苦勞は容易な事ではありません。その逃げるものをどこまでも追いかけて、この真実の御名を受け入れてくれよと、如来が私を拝んでおいでになる。これが我執に固った私の側からいえば、また容易に受け入れられぬ所以であります。しかしその至難である原因が私自身の側にあるのであって、与えて下さっている大悲の道にあるではありません。

二

聖道の行道はこれに対して、道そのものが至難なのであり、その体験を聖人は「自力聖道の菩提心 ころもことばも及ばれず……」と、『和讃』に述べられています。『住生要集』にも、菩提の道は要するに、四弘誓願の実践を期することであり、しかもその四弘誓願の実践が、事と理とにかなった表裏一体のものでなければならぬといわれています。思えば思うほど心も言葉も及ばれずです。迷の生の根本解決を願求しながら、我々は如何にしてその道を完遂

ばかり思えり」と言われているのは、易行ということを取違える心を戒められる言葉でありまじょう。人間には易きを好み、難きを厭うという性向が本来根深く宿っています。この心が易行という言葉を得手にきいて、安いの結構なこと、都合のよいことだと思ふのですが、このように安易を求める心は、聞法精神とは反対の方向をむいている人間本能であるといつてよろしいでしょう。易行道は決して安易道ではありません。それとは全く本質を異にするものです。安易を好んで易行につくなら、それは横着道に転落することになります。

「水よく石を穿つ」とは、聞法精神の根本を示されたものです。聖人は大経によつて『正信偈』に「難中の難、斯れに過ぎたるは無し」と語られ、『和讃』には

たとえ大千世界にみでらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは ながく不退にかなふなり

と誦されていますが、これも聞法と獲信の道が決して易

しえまじょうか。

迷の苦悩を何としても解決し脱却して覚りの世界を願求する心に、聖道も浄土も別はありません。ですから道緯禪師の『安樂集』には「凡そ浄土に往生せんと欲すればかならず菩提心を発するを源と為すべし」といわれています。その菩提心とは迷いを超えたいという切なる願いを原点とするものに外なりません。先にある安易道を求める心は、それなくして安易に楽に結構な身の上になりたいという願望でありますから、既にそれは仏道ではなく、浄土往生の道でもありません。

菩提の世界を思慕願求しながら、その道の絶えた私に、やるせない如来の自他一如の大悲心が凝って、南無阿彌陀仏の廻向を成就して下さったものです。仏かねて知ろしめして煩惱具足の私のために横超の直道をお与え下さったのです。これまさに浄土易行の易行たる所以に外なりません。感激なきをえまじょうか。

菩提への願求あるかぎり、如何に迷いは深くとも、その迷いの生に安んじていることはできません。もし迷いに安んじておられるなら聞法の縁もなかつたはずではありませんか。既に聞法の縁に値遇している事は、聞かずにおれないという状態に我れ識らず置れていることです。その身の上を思えば何としてもこの度は、生れ来つた一大事を解決せ

ねばなりません。「水よく石を穿つ」という金言は、捨てておけない我身の現実に迫る言葉です。

三

この私が迷いの生に安んじえないということは、迷いにさまよう私に、迷いを超えた光が深く関わって来て下さっているという証拠ではありませんか。流れのまにまに流れているものに流れの抵抗は感じられないはずです。流れのまにまに流させぬという力が加わったとき、流れの抵抗を感じるようになるのであります。迷いの生に安んじえないということも、また同様ではありませんか。

大悲は昼夜をわかつた無倦にこの私に働き続けて下さいます。しかし執我の濁流に流されている身には、摂取の招喚をききながらそのみ声が受け取れない。本願と自分との間をおさげしているものがある。参らせ心がいけないと聞きながら参らせ心がひそみ働く。こうした聞法上の葛藤は人間である限り誰れしもが経験するところです。久遠よりの情勢として止まぬこの悲しい心に如来は涙しておいでになります。この大悲の仏心と迷業の情勢と、いずれがより強いものであります。闇は光に勝つことのできるものではありません。虚妄は直理によって必ず破られるときが来るのであります。

自照 日誌 抄 (12)

— 煩惱を断じ得ないわが身 —

自分に云い聞かせる。お前は、もう七十になったんだぞ、覚悟はよいかと。

それにしても、おそろしい年としになったもの。まことに大悲護念のもと、遙けくも来つものかなであります。しかも昨今、いよいよ想うこと、「分け入っても、分け入っても、青い山」(山頭火)、煩惱無尽のわが身であります。

それにつけ、ありがたいことを教えていただきました。それは東京の菅原鈞氏から届けられた曇鸞大師ご緑の雑誌をめぐっていると、「不断煩惱得涅槃分」の一文が目にとまり、なんの気なしに読んでみると、「煩惱を断じ得ないわが身(常懺悔)、したがって涅槃分を得るはずのないこの身が、しかも涅槃分を得る。それ故にそれは讚嘆の言葉となる」とありました。

わたしは思わず坐り直し、曇鸞大師の不断煩惱のお言葉についての、この領解の文を繰返し拝読いたしました。ま

四

聞法は我が力で獲得することではありません。聞法は闇が光に照破され、迷妄が智恵に調伏され、不信が大悲に慈育を蒙ることなのです。この事実に決して間違いはありません。「いかに不信なりとも聴聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候う間、信を獲べきなり」何というたのもしく勇みの湧くお訓しでありましょう。タゴール翁が「宗教は真実に所有される身になることだ」といった言葉にも同じひびきを感じる思いがします。

二〇五条には、徳大寺の唯蓮坊の物語りが録されています。摂取不捨のことわりが知りたいと念じていたところ、ある夜夢想に「阿弥陀の今の人の袖を捉えたまふに、逃げれどもしかも捉えて放したまわず。摂取といふは逃ぐる者を捉えておきたまうようなる事をここに思いつきたり」とあります。お慈悲にて候間、信をうべきなり」というのもこれと同じく、真実の大悲とこの私との間に交されている、避けえぬおうけなき関係を述べられたものである。そのような摂取不捨の光中に調熟を蒙りつつあることがとりもなおさず聴聞に外ならぬのです。だから他の思案、工夫はいらぬこと「ただ仏法は聴聞に極る」と結ばれております。源左同行の言葉に次の句があります

ただのただでもただならず 聞かねばただはもらわれぬ
聞けば聞くほどただのただ はいの返事もあなたから

西 元 宗 助

ことに煩惱成就おぼのわが身。煩惱を断じ得ないわが身であります。さればこそ如来は大悲して、本願をうちたて、往生成仏の白道を、得大涅槃のお念仏を、わが身にあたえ給うのであります。なおこの玉文は、真宗教学研究所の宮城顯先生のもの、つつしんで讚嘆し奉る。

いささか旧日誌になりますが、さる五月二十七日(日)年一回の恒例の岡崎一道会に、花田正夫・榊原徳草両先生のお伴をして出席させていただきました。会場は岡崎市郊外の杉浦豊氏邸(榊原師夫人の実家)。

四国からも阪神からも、聴聞の方々が参集なさつて、広い二間の大座敷も縁側まで一杯のひと。それはそれは、なつかしい、一期一会のひとときでありましたが、今は残念ながら、その法味を書くいとまがない。

数日すると、参加された高松の高塩夫人から、帰途、洛西の浄住寺さまに一泊させていただきました。同行四人、無事帰

宅した旨のお便りが届きましたが、その中に木村無相師の詩が添えてありました。ありがたいので披露させていただきます。

なむあみだぶつ

親のよぶ聲

子のしたう聲

いろいろな方々から、おたよりをいただきます。そして、それぞれのお手紙によって励まされ、教えられています。ある方からのおたよりには

迷路幾億里 如来、灯自照

と附記されてありました。又、さる方からのには、バスの窓から見たお寺の掲示板に、次のような言葉が書かれています、ハッと心うたれました。

みごとに咲きぬ 誇り顔もせで
やがて枯れしほみぬ 泣(つぶや)きもせで

四天王寺から送られてくる「四天王寺」という雑誌に、札幌の浅田峰石さんという方の歌が載せられていて、いつも心うたれる。その中の二首ばかりを、ご覧に供します。

聞 光 願 生

一人旅はなかなか道が遠い。二人で語り合いながら旅すれば遠い道でも知らぬ間に行ける。二人連れで歩いたとて飛んで行くわけではない。矢張り同じ距離の道を歩くのだ

さて私の生活をふり返って見ると、何一つ愚痴の種でないものはない。すべったことも、ころんだことも、すべて小言の種ばかりである。光を聞かしていただいて、過去を省りみると、私の過ぎて来た道はすべて私にとって一本道であった。起きたことも、ころんだことも、みんな私が光を聞くための道程だったと気付かされ、過去のすべてが私になくてはならぬことであつたと意義づけられた。

何のために人に生れたのだらうか？との質問をうけると、私は常に前述の如きことを味わされる。

光を聞く世界以外に、どこに人生の意義があらう。物の

正信偈よみつきゆけば涙流れ オエツいくたびナムアミ
ダ仏 (フキオ逝く)

餌をあさる捨猫一つ秋の夜の草むらにあり 虫しきり鳴く

(昭五四・七・一日稿)

慈 光

をさだ はるみ

人人のいのちはかぎりあり

暗く悲しきものなれど

念仏をいのちに受け留めて

弥陀の悲願のまことさを

知らしめたまいし身の果報

稱えまつれや
ナムアミダブツ。

昭五四・五・二十一日

清 水 清 吉

世界では満足するということは不可能である。

たまたまお話を聞き、本を読んでも、ややともしれば、私の勝手な都合のよい口実に用いたくなる。光に触れること、言い換えれば、信仰生活をして居られるお生活に触れると、念々稱名、常懺悔させられるばかりだ。

(昭和九・七月)

私自身の醜い姿にあきれた時、なんとした自分は仕合せ者だらう。このような私を皆様が暖かく包んでいて下さるとは！この世が光り輝いてくる。然し、私自身を忘れていると、人をのろい、世をのろい、不平不満ばかりだ。自分の姿に気付かずに日暮しすることが、この世をいかに不安な、そして焦慮の世界にすることだらう、これをおもうと一日だって、教への光を仰がずにはいられない。

私にとっての奇蹟は、地が割れたとか、逆竹が生えたと

か、そんなことではない。どう算盤をおいても割り切れぬ私をして、今日かく生かしめられることは、何物にも替えられぬ大きな奇蹟だ。
(昭和九・八月)

○ 未来に苦しむことが、よしどんなであつても、現実には苦しむことが一番苦手(にがて)だ。だからどんなに仏様が手強くご意見なされても、目先きのことにとらわれて、教えを深くいただかぬ、あさましいことだ。

○ 土用とは言いながら、余りに涼しい。しのぎやすいが稲にはよくない。自分も鞭打ってくれる人がなければ、らくではあるが心がふとらぬ。毎日お念仏に鞭打たれる自分はほんとうに仕合せ者だ。

○ 「有難うございます」と、「申訳ございません」とは離すことができない。「有難うございます」のみでは恩に馴れ、「申訳ございません」のみでは、向う様のご親切を素直に受けとれぬ。

○ 私の姿は、明日何を仕出かすやら計り知れない、私の姿を見れば見るほどあぶない。甚だ不遜の言であるが、常にお友達に申します。もし万一、私の様なものをあてにして

の顔を知ることが出来ない。

○ いかなる人でも絶対無限に対するとき、そこに出てくる価は零である。自分を零としてすべての人に対するとき、そこに出て来る答は無量大の力である。
(昭和九・十月)

○ 人と人との交りは、大低利害関係を基としている。だから刎頸(はねくび)の交りなどと云って居ても、利害が相反すると、たあいもなく離れてしまふ。
まったく人と人との交りぐらい浮雲めいたものはない。それを愛らないもの、いつまでも続いて行くものと見るところから悩みが生れる、なさないことだ。

○ 絶対信に支えられて、はじめて魂の通う交りが出来、破れない交誼が出来るのだ。何となれば、よし利害関係で、いやな心が起きても、なお地下水のように心の底に通うものがあるから……。
(昭和九・十一月)

○ 無心に遊ぶ子供の姿を見たとき、誰か怒る気持になろう、無心に眠る子供の寝顔を見たとき、誰か邪気を発するものがある。天真爛漫の童心に接するときほど、わが身を省みられるときはない。童心とは無我の鏡である。ひるがえ

道を求めておられる方があつたら失望されるだろう、仏様と直き取引きをお願いしたい。
(昭和九・九月)

○ 相手を理解して涙をそそぐ世界は、自己にめざめさせていただくところから開ける。自己の値打にめざめずして、どうして相手を理解し得よう。自己の値打ちを知るには、鏡にうつさねばならぬ。

○ いや、とつきの昔に、先手をかけてうつして御座るのだが、自分が煩惱の雲霧に閉ざされて見えずに居ったのだ。いま、大願業力の御催しにあずかり、初めて見る己が姿のあさまし、あさまし。仰がんかな大悲弘誓の本願力を！
(昭和九・十月)

○ 真面目に世の姿を見ていこうとすると「それでは世の中は通れない、要領でいけ」と云う。そこに若人の反感が湧いてくる。真面目でいかれず、要領でも進まねず、一体どう歩めばよいのか！

○ そうだ。真面目に世を見る前に、まずその真面目さをもつて、自分を見るのを忘れていた。然し、自分の目で自分の顔は見えない。自分の顔は鏡によって初めて知ることができる。もし鏡にうつる自分の姿を疑うなら、永久に自分

○ つて私の姿を見たとき、無我の境とは余りにもかげへだたり、それは唯遠い大空の月をただ仰ぐばかりである。
日日利害の問題にとらわれて、はてしない泥田に沈むあさましい生活。されど、やるせなきみ親の大願の成就せられたる至徳の尊号、南無阿弥陀仏のたまものにより、み親の唯一人子とさせていただき、泥田の私の上に、及びもつかぬ月影を宿させていただくことは、ただただ有難いことだ。一子地の境地とは、ただ童心の境地にしてまたそこに無我の境地が展開させられる。これというのも、ひとえにみ親の念願の御催しによることである。
(昭和九・十二月)

○ ある友人の家庭に、子供達が大きな雪の山を造って、中を洞窟にした。そして二人ばかりその中に入って火を焚き始めた。ところが上の方に穴をあけるのを気付かぬものだから、煙の出場所がない。たまたまなくなって、そこからは出て来た。それを見て思わず笑ったが、私の生活は全くこの雪遊びと同じだ。いやそれ以上、煙出しどころか、出口さえ閉じて、煙にむせんでいるのだと気付かせていた。いた時に、ただお念仏一つによって煙を解消させていた。くばかりだと、一人念仏させられた。
(昭和十・二月)

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

ただ聞く一つ

和上 禿頭誠師

和上おおせに
わが身一つの後生と
なってみれば

恥(はじ)も

面目(めんぼく)も

損(そん)も

得(とく)も

言うてはおられぬ”

後生の一大事は

わが身の今の一大事

恥も面目も

損も得もなく

有縁の善知識に

よくよくお聞かせ

いたたくほかはない

聞く一つ

ただ聞く一つ――

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ただただ六字の

和上おおせに

明けても

暮れても

夜中の夢にまで

鬼つくることに

かかりづめのこの心に

仏になる相談かけている

とは

門(かど)ちがいの

ほどがある

まことにつまらぬこと

じゃ――”

相談さきは如来さま

相談さきは如来さま

ただただ六字の

おこころ聞くこと

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

そのお知らせが

和上おおせに

日々(にちにち)

死にどおし

おちづめ――”

久遠劫来の親さまは

日々(にちにち)

かかりづめ――

セツナの間も忘れたまわで

だきかかえての二苦勞と

お知らせ――”

そのお知らせが

今のナムアミダブツ

おちるぞよ

助けるぞよ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツと

知らせづめ

かかりづめ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ああ ナムアミダブツ

和上おおせに

狐狸(こり)も

蛇蝎（じやくつ）も

すべて受けこむ

大心海——

なでてさらえて受けこむ

大心海

ああ

大心海

大心海——

狐狸も

蛇蝎も

すべて受けこむ

ナムアマミダブツ

なでてさらえて受けこむ

ナムアマミダブツ

ああ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

はっきり

和上おおせに

”ともかく

はっきりなりた

はっきりなりたと思

生まれつきのメクラ

目をあいて一人旅を

するようなものじゃ

メクラのままを

メアキの親が

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツと

手をひいて

つれてゆくなり

つれてゆくなり

はっきりいらずと

はっきりさせて

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

大悲の願船に乗じて 光明の広海に浮ぶ

Sさんは慶応大学に入ったけれど、ひどいでもりで苦しんでいた。矯正所にも入ったが、出て実社会にふれると駄目になってしまった。又人に笑われても動揺せぬ心になりたいたと、坐禅にも通い、色々の修養会にも出たが、すべては水面に描いた絵で、そのまま消えてしまった。一時は将来に絶望して死をも求めたが、死にきれないでいた。

その時、近角先生の求道会館の落成したことを紹介した新聞に、近角先生の徳もたえてあった。そこで早速Sさんは先生をお尋ねして、その苦衷をそのまま訴えられた。先生はその一つ一つを涙をもって、うなづきうなづき聞きとられた。そして、そうした病で苦しみ、他人から笑われる身を、仏様お一人は何処々々までも憫れんで下さると、ねんごろに聞かされたのである。

すると、Sさんの心が不思議にひろくなり、仏様が味方になって下されば千人力だと喜び、しばらくはどもりもなくなっていた。ところが十日も経たぬうちに、又しても

花 田 正 夫

どもりが始まって、元の黙阿弥となってしまった。そこで再び近角先生をおたずねして、

「先生におききたいだいて、どもりもらくになっていました。矢張りだめになりました」

と訴えた時、先生は毅然とされて

「どもりがなると誰が云った！ そのどもりで苦しむ者を可愛想と見て下さるのが仏様なのだ！」

ときびしく訓えられた。この一言に悄気きついていると、

「これから、日曜講話に来てよく聴き給え」

と云われたので、ホツとして帰った。それによってSさんは自分の考えが根本から間違っていたことに気づいた。今まで仏法を聞いていたのは、自分のどもりを治したいためであった。それは自分の欲望を仏様になんて利用していたため、仏法を自分の願いを満足させるために利用していた。まことに仏法を汚す不逞の徒であったと慚愧し、それからは、自分の願いはそのままおいて、仏様の私共にか

られている願いを聞かせていただこうと、百八十度の転回があった。

爾来、聞法を重ねられるにつけ、一語一語が身にしみ、どもりが治ったといつて浮かれて喜び、なやらぬといつて沈みこむ、浮沈してやまぬ身を悲憫下さるおまことを仰いで念仏させていただくようになられたのである。

其後、七十近くなられて、突然お来訪下さった時も、矢張りどもりがひどく、名刺でやつとSさんと判るようなことであつたが「どもりは、初対面の時には緊張するのでよけいにどもりますが、ともかくもこのどもりのおかげで佛法を聞かせて頂き、どもるとかどもらぬとかを超えて、どもりがやまぬまんま行きつまずらずにすごせるようになりました」と語られた。

以上は、疾病と信仰との交渉を明らかに知らせていただけるありがたいSさんの御体験談であつた。我々が病氣すると、その治療のために専念するが、軽い病はそれですむけれど、思うようになるとばかりは限らない。

そうなると神仏にすがつて平癒を祈願する。それですこしでも調子がよいとお蔭様でとよろこぶが、思うにまかせぬとなると、神も仏もあるものかとなつてしまふ。これは神仏を利用して、功利的信者である。

ずるやらんと心細くおぼゆることも煩惱の所為（なしわぎ）なり。久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里はずりがたく、いまだ生れざる安養の浄土はこいしからず候こと、まことによくよく煩惱の興盛に候にこそ。名残り惜しく思えども娑婆の縁つきて力なくして終るときに彼の土へは参るべきなり。いそぎまいりたき心なきものをことにあわれみたまうなり。これにつけてこそいよいよ大悲大願はたのもしく往生は決定と存じそうらえ云々」

この金句は、私が色々お教え頂いていた岡山医大の生沼教授の御令室が肺疾で二人の御子をのこして、鎌倉の療養所でお亡くなりになられた際、看護婦さんにごことを読んでおくれと頼まれ、

「若い貴女に色々お世話になり、御礼のしようもないが、この歎異抄のお言葉だけはよく覚えていて下さい。私は二人の子供をお母さんにあずけ、治る見込みもない病氣であるのに、もう一度子供の顔を見たいと、名残りはつきないにつけ、ここの聖人様の仰せが身にしみます。これがなかつたら真暗闇です、このお心に支えられて生かして貰っています、どうか貴女もくりかえして心に入れておいて下さい。それがせめてもの私の御礼のおくりものです云々」

と告げられ、やがて亡くなられたのであつた。

そこで大切なことは、病が悪いと歎き、少しでも良いと浮かれる、その病状如何で動揺してやまぬ自分自身の心のおさまる道を求めることである。

これについて、我々の勝手気ままな願いは、結局行きつまるのであるから、覺者にまします、仏様の我々をみそなわされた上におこされた本願を聞かしてもらうことが大切なのである。

如来の作願をたずぬれば、苦悩の有情をすてずして廻向を首としたまいて、大悲心をば成就せり

親は子になくはならぬことのために専念する、仏様も煩惱具足の凡夫として、縁にふれては迷いに惑うて苦しむ我々を救い遂げずばやまじとの御本願を建立して下さったのである。

大経にも「諸の庶類のために不請の友となり、群生を荷負してこれを重担と為す」とある。我々はそうした仏様のましますことさえも知らず、自業自得としてはてしなく苦海に沈むのを、求めず願わぬのに、仏様の方から慈悲の御手をさしのべて下さり、運命共同体として背負うて下さるのである。

こうして我々を撰取して捨てたまわぬ大悲の至極を、歎異抄九章の後半に親鸞聖人がお知らせ下さっている。

「いささかの所勞（わずらい）のこともあれば、死なん

又、ドイツ語の池山先生の御令室も、胃ガンで三十九才でお亡くなりになったが、不治と知られて非常に念仏をよるこばれるようになり、身体動かせる間は、五人の御子や母堂や御主人の着物の整理をつづけ、段々重くなられると、近角先生をお迎えして、お宅で生別に死別をかねた法話を催されたのであつた。その時非常によるこんでいられたので集る人々も、何処にも暗さが感じられず、不思議なことと感心していた。

近角先生は、この時「奥さん、今日は非常に喜んでいますが、いよいよとなるとこうはいかない。ことに五人の子供をのこして逝く身は、つらいであろう、悲しいであろう。それにつけても歎異抄のこの九章ばかりが一番の力になつて下さる云々」と語られ、その後、ここを枕屏風に書いて渡されたのであつた。

その頃、広島県の鞆に居られた明円寺さんが「奥さんのおよろこびにふれていると、お浄土もさぞかしこいしいことでしょうか」とおたずねすると、「いいえ、一日でも長生きしたいので、お浄土がこいしいとは思いません、矢張り歎異抄九章の通りです」と答えられた由である。

さて池山先生は、近角先生の大幅の軸を掲げていられたが、生きるか死ぬるかという大病をせられ、幸に一命を

とりとめられた頃、お伺いすると、

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ず、即ち無明の闇を破し速に無量光明土に到りて、大般涅槃を証し、普賢の徳にしたがうなり、知るべし」

とあるのを指差されて、「即ち無明の闇を破し」までは現生で味うことが出来るが、そのあとは往生成仏して開ける世界であると御自身の病中の所感から話して下さった。

「家族の者もとてもたすかりそうもないことを心配してくれ、自分でも今度はいよいよ駄目かとなって、死の横顔にふれた。そうなると行くときは真暗であるが、そこにフトお念仏が浮かぶ。するとそれがともしびとなりて行方を照らして下さった。即ち無明の闇を破しと、そこにあなたの御働きを感佩した。」とお念仏裡に話して下さった。

このことは私共の信の旅に大切な道しるべをいただいたのであった。凡夫として、「無明、煩惱われらが身にみちみちて、欲もおおく瞋り腹だち、そねみねたむ心多くひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらずきえずたえず」の身が、仏心の光明に照護せられての浄土への旅を身をもって、ギリギリのところまで信証して下さい、人間として味いうる限界を明らかにし下さったのであった。

撮 取 不 捨

私も北野君に負けてはならぬと一生懸命に働きました。その後は管理部に行く度毎にヒソヒソと負け戦のことが聞えてきました。会社で製作している機械で九州方面に送る機械は堺港の税関の倉庫に二百幾十機も山積にしたまま運送も出来ない有様でした。管理部で早く送って下さいと申しますと、何時も船が来ないの一点張りです。玄海灘、瀬戸内海まで敵の潜水艦が来て居て、帆前船でも通れないことが判りました。

そのうちに日本の主要都市はB29の空襲をうけ、大阪は三月十三日に大空襲にあい、妻と子供を田舎に帰し、私一人の生活になりましたが、私も軍籍が第一補充兵で、山砲兵でしたし、教育召集も受けていましたが、一向に召集令状がきませんので、私は町内の防護部長を十八年の初めから終戦まで勤めました。幸に町内には空襲による死者はなく、焼夷弾で焼かれた家は十六戸ありましたが、類焼を出さなかった事は不幸中の幸でした。

盆 歌 巖 谷 小 波

ぼんは嬉しや別れた人も 晴れて此世へ会いに来る
むかし話につい夜もふけて 月もかたぶく西の空
どんと叩いた太鼓の音に あの時この世の戸が開く
りんねはなれて気も軽々と まわる踊りの輪の円さ

全 上 常 盤 大 定

仲間同志の心がうつり 空にまんまるお月さま
踊り念仏気も軽々と 明日の家業が苦にならぬ
色は匂えど散る日が近い いつも変らぬお月さま



石 田 十 九 三

八月九日、敵機はポツダム宣言のピラを撒きちらし、十五日、天皇の御言葉で戦争は終わったが、勝ちと思ひ、勝たなければと頑張った人達は、身体の衰弱と張りきっていた心のやり場がなく、皆声をあげて泣きました。

八月二十日頃から、会社では残務整理が始まり、十月の末に終り、会社を一時解散となり、無職の身となりました。同じ資材課に、前の商人であった人が居り、化粧品の販売をはじめ、彼は買入れをやり、私は販売を受け持ちました。面白い程売れましたが、素人商売のこととて、品質のことも知らず、粗悪品を買入れ入れてしまい、そのために使った人から顔に吹出物が出来たと訴えて来られ、治療代まで払ったので、仕事は倒産してしまいました。

当時すでに、米第九海兵団が大阪に常駐しており、近隣の豪邸は皆米軍将校の家に改造されました。私の友人が、改造の仕事を請負っていましたので、そこで私に会計を頼まれました。宝塚、仁川、花屋敷等の仕事をしましたが、

下請けのことで、元請けにお金を請求に行くと、棟梁がさきに賃金を貰って居る有様で、その人はギャンブルに皆使ひ、大工に払う金がない有様で、私は仕事を止めました。

その後種々な仕事に変わりましたが、昭和二十五年、吹田市の薬品製造会社に勤め、爾来二十三年余りこの会社で働きました。

昭和四十八年五月末に神経痛のため退職しました。その間、宮地廓慧先生のお導きにより、御法縁を頂きました。又、稲津先生は京都から大阪の四天王寺に御出講の時は必ず私にお案内を下さされ、種々と信後の相続につきお教えをいただきました。

昭和三十年頃、京都西山の浄住寺の榊原先生から御案内をうけ、池山栄吉先生を追慕し恩徳を謝する一追会が十月末の日曜日に催されるとのこと、早速お参りいたしました。一追会は、何時も榊原先生の歎異抄の感涙あふれるご拝読に始まり、名古屋から出席せられた花田先生の御法話があり、続いて池山先生との御縁の深かった先生方のお話で会は終り、榊原先生の奥様を中心に、お心のこもった夕食を頂きました。あとは夫々に談合、又質疑もありますのが通例であります。

今は亡くなられましたが、松本解雄先生は毎年四国から御出席を下さいますので、先生ありがたいことと申上

た木の近くへ行くと、幾度もその様な声がするので、彫刻してみると、仏様らしくなつたので、倒れた木で次々と仏像を造り、何百体となつたそうです。そこで木が無くなるに紙に楷書で、正信偈をうつし、中央は南無阿弥陀仏と白く浮かしたものを私にも送ってくれました。

昭和五十年六月、先祖の法要が営まれるので生家に行くことになりました。然し高血圧と歩行困難な神経痛のため医師に相談しますと、まあ行って来なさいとのことですから出発しました。その頃、九月には両膝切断の手術をすることに決心していたので、法事がすみました翌日、盛本君にもう一度会つて、今迄のお礼を申し上げたくて、お宅に訪問するよう電話をしました。その時、大阪から来ていた姪がそれを聞いていて、姪の伯母二人と一緒に、そのの仏様を拝みたいと申しましたので、甥の車で五人で参りました。

その時、阿弥陀經に南無阿弥陀仏を浮かした書や、般若心經の中に、南無阿弥陀仏を浮かすとか、其他仏画も描いておりました。今年、一月末にきました手紙には、九谷焼の飾皿に、聖徳太子の十七条憲法を書き、中心に和の字を浮かしたのや、又僧侶用の湯呑に、十七条憲法を書いたり、香炉に一度薬を塗つたものに、細字で書くので目がくちやくちやになるとも書いてありました。

げたものです。お元気で万年青年のような方でしたが、三年前も前に急逝されました。

名古屋に転居

昭和四十九年、長男が名古屋支店に転勤になりましたので、名古屋は花田先生もおられますので喜んで転居しました。四月十七日に移りましたが、当時私は一町程も歩けない足腰の神経痛と高血圧のため長男に自動車を送り迎えてもらつて花田先生宅の一追会に参らせていただきました。

先生はいつも色々のお話の中で、何時も阿弥陀仏の大慈悲をお述べ下さるのでありがたく、帰りはふところに懐炉をいれたようにポカポカ心暖まって帰りました。

私には小学六年生の時に机を一つにしたクラスメートが居ります。いや学友と言うよりは親友と云つた方が適當かと思ひます。級友の住所を知らせて下さつたり、同窓会の通知などしてもらいました。盛本隆平君と云う人です。私の郷里の村での豪農の長男で県立農学校に入りました。小さい時から字を能く書きました。昭和三十年頃の台風で屋敷の太木が倒れたので枝を切りに登り、木から落ちて頭を打ち、生死の境を彷徨をしたそうです。幸に生命をとり止めた後に、倒れた木の近くに行くと、仏を彫ってくれと聞えたそうです。初めは何のことかわからず過したが、末の娘を亡くしてから、世の無常を感じていた時でもあり、倒れ

昨年暮に北陸中日新聞の記者が、町長の紹介状を持って盛本君をたずねて、種々と写真をつつして行つたそうです。毎年、八十歳になられた方々に仏像を送呈しており、一月十日の北陸中日新聞に写真入りで掲載してありましたそうです。

私はこうして、幸に多くの善知識や、善友に取り囲まれて念仏申させていただく身の幸せを念仏裡に深く感謝しております。但し池山先生の告別式の文は、聖鸞誌から転載させていただきます。厚く御礼申し上げます。

歌集 含 紅 集 吉野秀雄

ひと日ひと日大切に生きむと気づきしは足萎へし三年前
よりのこと

手にとどくめぐりに物の殖えゆけば物に埋れつ常伏しの
身は

門庭も覗くすべなみいくたびか妻が紅葉を拾い来て見す
何やらむ生くるにあらで生かされてゐると実感す無碍光
かこれ

あとがき

昨年は福岡市が水不足で大変だったのに、今年には東京を中心に給水制限とのこと。日本は水に恵まれて来たのに、天候異変とは云え、豊富になった物資に浮かれている我々に大きな反省を促しているようにも思えます。

さて近角先生のお話は、釈迦弥陀は慈悲の父母として我等を慈育下さる趣きを詳しく述べて下さっています。ともすれば、父は打つ母は抱いて悲しむを變る心と子や思うらん、と古歌にあるように、甘え心から嚴父の心をとりおとしがちな身を知らされますことです。

次に、神戸商科大学の元学長の井上様から玉稿をいただきました。自照誌に連載していたられたものの続稿をこれから頂けますこととありがたく喜んでいきます。蓮如上人の徳風を聞かせていただきました。

西元様はお多忙この上もない中からいつも速達で送稿して下さい、見るもの聞くものの中に法音を感得されてのお味い、私共

の足下を省顧させられますこととあります。清水凡禿さんは、盛岡の篤信者でありましたが、私はすでに亡くなられてから信味を知らされました。未亡人はいまま盛岡で静閑のお生活であります。

木村さんは、七月下旬に退院されて一時太子園に帰られるとの知らせをうけました。どうか無理のないようにとオロオロと念じております。

石田さんの原稿はこれで終りました。奈良県に移られて、足の不自由ななかにも、法の友を求めてポツポツ訪ねていられる由であります。五ヶ年間当市に居られたので、日曜の集いに姿が見えぬのを皆様が淋しがつていられます。そうしたお人柄で、何処に行かれても皆様に親しまれることでしょう。

著書紹介

眞実の泉

井上善右衛門集

発行所 東京都杉並区西荻南一丁目

二二二一〇六

定価 教育新潮社

一六〇〇円

著者住所 振替東京七四九八七番
神戸市灘区篠原北町

三一九一二七

御案内

(八月休み)

○毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り。又は北山下車。地下鉄、御器所通り下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駈上町二ノ八八

電話八二一〇七〇三七番

印刷 愛知県西加茂郡三好町大字福谷
刷人 坂部 光雄

発行所 慈光社
名古屋市南区駈上町二ノ八八

振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七